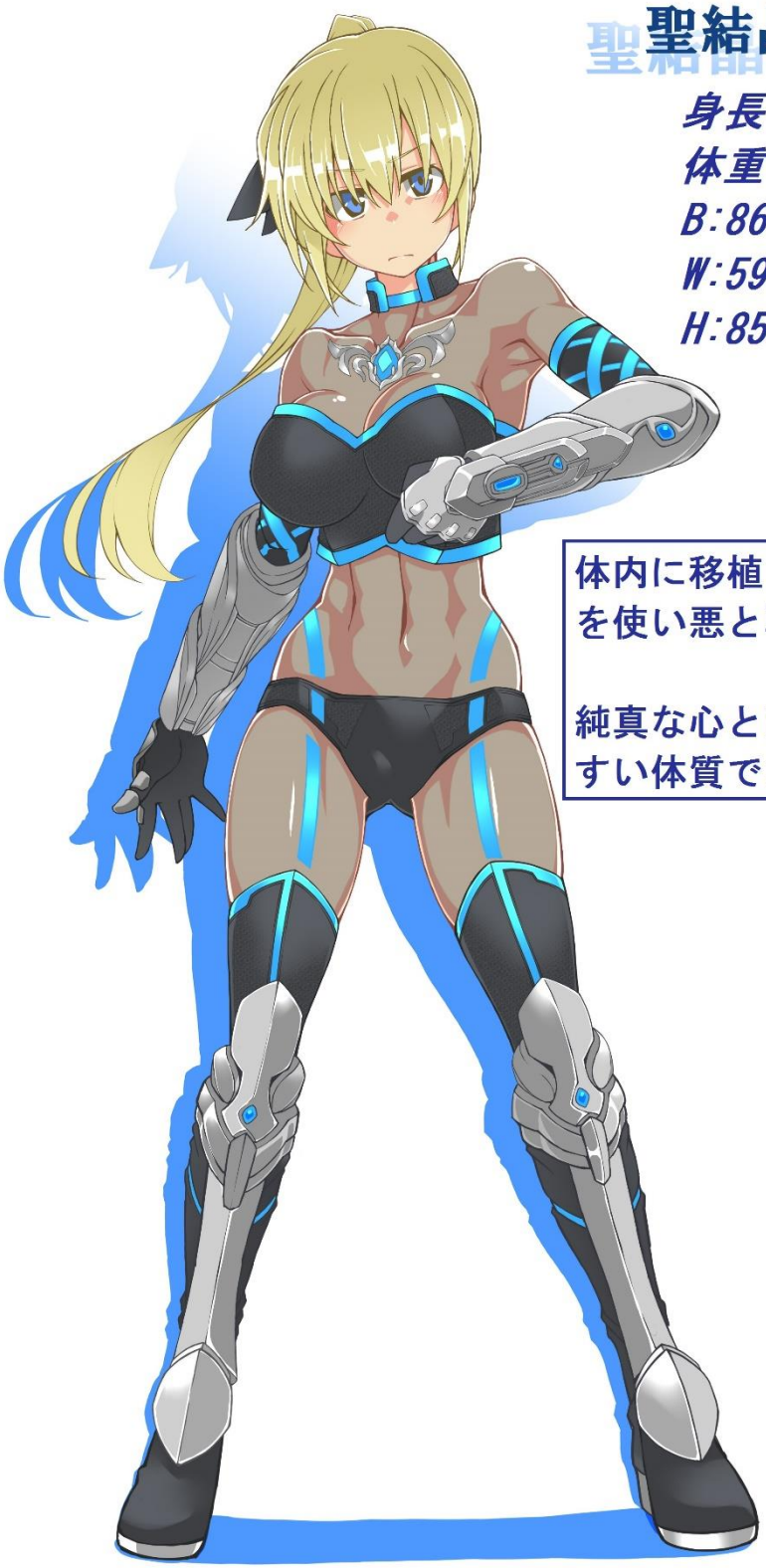
聖結晶姫
アリア
～催淫虫の侵食
寄生された聖結晶～
18
ADULT ONLY

○登場人物紹介

・蒼樹美月（あおきみつき）／聖結晶姫ミツキ



聖結晶姫ミツキ

身長:160cm
体重:50kg
B:86cm(Dカップ)
W:59cm
H:85cm

体内に移植された聖結晶の力を使い悪と戦う変身ヒロイン。

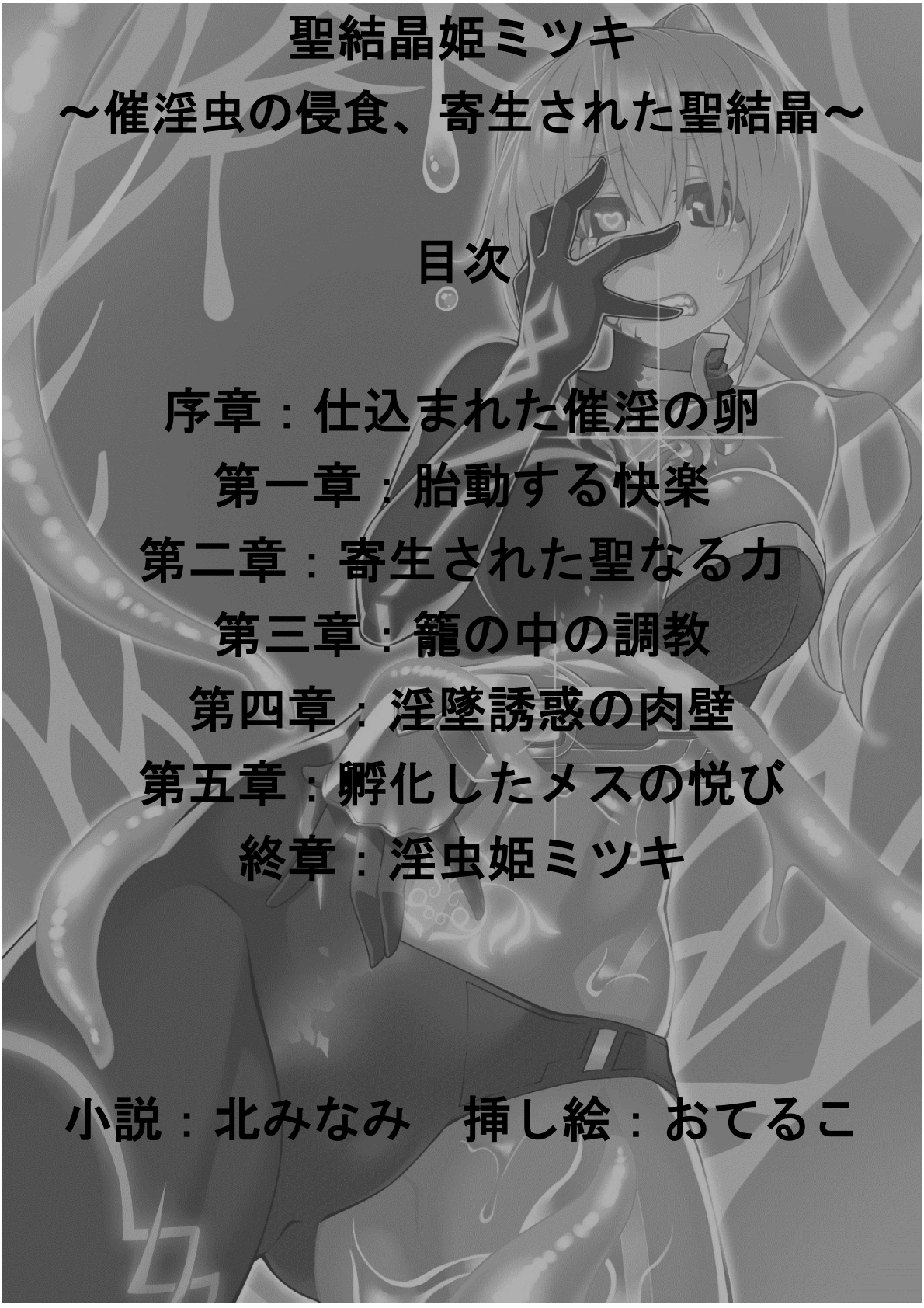
純真な心とは裏腹にとても感じやすい体質である。

・**シム・インセント**
ここ数年で事業を拡大している青年実業家。裏では事業の資金源として生物兵器の開発に携わり、悪の組織としての活動を行っている。キザな男で女癖が悪い。
ミツキを屈服させることで聖結晶の力を得ようと目論んでいる。

・**美蜂**
シムの部下の女性。「～～ッス」が口癖の陽気な性格とは裏腹に高い身体能力を持つ戦闘要員。
自称「一撃必殺のメス蜂」。毒針を使った攻撃を得意としている。

〇用語紹介
・科学都市
科学の発展のために研究所や病院、教育機関の集めた人口の浮き島。
かつては悪の組織「レギオン」によって裏から管理され、非人道的な実験場となっていた。

・レギオン
科学都市を牛耳っていた悪の組織。聖結晶姫ミツキの活躍により、組織は壊滅へと追い込まれたが、ミツキは過去に１度レギオンに敗れ、屈服調教を施されている。
※ミツキとレギオンの戦いについてはpixiv版聖結晶姫ミツキを読んで頂けるとよりお楽しみいただけます。
（http://www.pixiv.net/series.php?id=184272）



聖結晶姫ミツキ
～催淫虫の侵食、寄生された聖結晶～

目次

序章：仕込まれた催淫の卵
第一章：胎動する快楽
第二章：寄生された聖なる力
第三章：籠の中の調教
第四章：淫墜誘惑の肉壁
第五章：孵化したメスの悦び
終章：淫虫姫ミツキ

小説：北みなみ　挿し絵：おてるこ

序章　仕込まれた催淫の卵

上空を覆う厚い雲が一陣の風によって流されていく。夜空を隠していた大自然のカーテンが開けられると、煌めく星の瞬きと共に弧状の月が顔を出し、暗い闇に閉ざされていた路地裏へと光を注ぐ。

天然のスポットライトが焦点を当てる人気の無い街の一角には殺伐とした空気が張り詰め、そこだけが常識から切り離されたような違和感に包まれていた。

「グ、ガッアアアア！」

静寂を破り発せられる奇声。路地裏に広がる異質さの中心にいたのは脂肪の塊をいくつも重ね合わせたような怪物だった。

ツギハギだらけの不気味な生き物はダルマを連想させる胴体に丸々と太った手足が生え、溶けかけている頭部のおかげで辛うじて人の形を保っている。

もっとも、これを人間と呼べるかは疑問だろう。知性の欠片もないクリーチャーはただ本能に任せ周囲を破壊し、人を襲うだけの殺戮兵器と化していたのだから。

ヒビ割れた壁にはクレーター状の陥没がいくつも刻まれ、巨躯が生み出す重量はアスファルトに亀裂を生じさせている。

対峙したならば人間などガラス細工のように粉砕するであろう圧倒的パワーは、ただ壊すためだけに作られた生物兵器の証だった。

「くっ……巨体に似合わず、スピードもかなりのものだったのね。少し、甘く見過ぎていたわ……」

そんな化け物の前に一人の少女が立っていた。

恐らくはこの怪物から逃げ続けていたのだろう。薄っすらと汗を滲ませる白い肌は健康的な朱色を仄かに浮かべ、息もやや上がり気味だった。

まさに美女と野獣といった組み合わせは普通であれば逃れられない地獄を想像するはずだ。

しかし、そんな絶望的な状況に置かれながらも少女の持つ切れ長の瞳は鋭さを失わず抗う闘志がしっかりと宿っていた。

若さ溢れる容貌は瑞々しさの中に大人へと成長途中の色香がブレンドされ、綺麗という言葉が具現化されたかのような存在だ。

凛と引き締められた桃色の唇と流麗な稜線を描く高い鼻。それらがクールな瞳と共に絶妙のバランスで配置された顔立ちは美少女と呼ばれるために生まれたような作りである。

背中につくほどの長い黒髪が差し込み始めた月の光を受けて艶やかに輝くと、少女の持つ大人びた雰囲気に幻想的な美が上乗せされ、危険に晒される姿さえ見惚れてしまうほどだった。

「グッシャアアア！　オガズ！　オバエ、オガズゥゥゥ！」

獣と変わらぬ怪物の思考は自制を持たず欲望を垂れ流す。粘つく開口音を響かせ開かれた大口から粘液が勢い良く吐き出される。脅威的な噴射の速さに対し、持ち前の運動神経の高さで辛うじて反応する少女。地面を横に転がり回避を試みるも、液体という拡散性のある物質を完全に避け切るのは不可能だった。飛び散った粘液が衣服に付くと繊維だけを狙ったように溶かしていき、身に纏うシャツやショートパンツから白い煙が上がっていく。

「やっ!?　何よこれ、服が溶けて……この、変態！」

怒りを示す鋭い眼光は化け物を睨み付け、少女の頬が走っていた時とは別の意味で赤く染まる。

硫酸でもかけられたかのようにボロボロになっていくシャツが形を維持できずに崩れてしまい肌蹴ていく少女の身体。

布越しにもわかる少女のスタイルの良さは溶けていく衣服のせいで背徳感を増し、凛々しき天使のような顔立ちに相応しい女神のごとき身体を露わにしていく。

ブラジャーの肩紐が溶けてしまい、慌てて手が添えられた胸元は抜群の存在感を示すDカップバスト。

羞恥の心で胸を隠そうとするも、掌に収まらない巨乳は支えきれない。虫食いのような穴が広がる下着がブチリと音を立て、片方の乳房がこぼれ落ちてしまった。モチモチとした美乳はブラなど無くともお椀を逆さにしたような形の良さを維持し、見ているだけで柔らかさとハリの伝わってくる豊満さを持っている。

先っぽだけでも隠そうと指に力を込めると、軟乳がムニュリと歪み、逆に肉付きの良さをアピールしてしまうような格好となってしまった。

少女の発育の良さはバストだけでなく、女らしさを宿したヒップからも窺える。

布地の面積が減っていくショートパンツ。段々と食い込み気味になるお尻はしっかりとしたボリュームを持ちながらもだらしなさを感じさせず、キュッと上向いて引き締まっているイメージが強い。

溶けていく衣服と晒される肌に対する恥じらいから身を捩ると、糸状になりつつあるショーツから尻タブが僅かにはみ出

し、腰の動きに合わせて弾力たっぷりに揺れてしまう。
薄っすらと腹筋を浮かばせるお腹や、無駄なものなど一切無い括れたウエスト。それらとの対比もあるせいか、女らしさに溢れた肉付きの良さが強調され、化け物でなくとも涎を垂らしてしまいそうな色香があるのは確かだろう。
グラビアアイドル並のスタイルの良さを維持しつつも、長身の生み出すスラリと伸びた脚線はアスリートを思わせる力強さを感じさせる。
柔軟性に富んだムッチリとした太腿から躍動感たっぷりの脹脛。キュッとしまった足首は美脚のラインに牝豹を連想させる凛麗さを付与し、足と言うパーツひとつとっても、目が離せない造形を持っていた。
月の光を受け、美と言う単語がそのまま人の形を成したかのような少女。
彼女の名は蒼樹美月（あおきみつき）と言う。
（こいつ、こんな溶解液まで持っていたの!?　マズイわ……このままじゃ、わたし、裸にされちゃう）
目撃者は目の前の怪物しかいなくとも、年頃の少女にとって裸を見られるのはやはり恥ずかしかった。
片方のブラカップがブラブラと垂れ、露出した胸を隠す美月。服についた液体は強い粘性を持ち、油がこびりついたように手で払い落すこともできなかった。
このまま放っておいては、いずれ裸になってしまう乙女のピンチ。
しかし、事態は全裸になるよりも更に危機的な状況へと発展していく。
「キッシャアアアア！」
怪物の奇声と共に脂肪の塊の一部が紐状に伸びたかと思うと、美月の足首に絡み付き、グラマラスな少女のボディが高々と持ち上げられてしまった。
「きゃっ！　ちょ、ちょっとこいつ、ふざけないで！」
逆さに吊り上げられた美月の肌が月の光を反射する。ムチムチと張った柔らかな肉感がピンチに中に少女独特のエロスを追加した。
ロングヘアーの黒髪が重力に引かれて垂れ下がり、風を受けて煌めきなびく。
そうしている間にも服は溶けていき、辛うじて繋がっている布地のあちこちから裂ける音が聞こえ始めていた。
動きやすさを優先して服装をコーディネートする美月の性格が災いとなる。元々タイトな衣服は肉感豊かな肉体によって

内側から押し広げられてしまい、崩壊を加速させてしまっていた。
ビリッ、ビリビリビリ！
拘束から逃れようと身体を揺すると布の裂ける音は大きくなり、下手に動けなくなってしまった美月。
そんな抵抗の低下を化け物は獲物が弱ったと思ったのか、美月の見ている前でゆっくりと大口が開かれる。
異臭を放つ口腔が舌をくねらせ、極上の美肉を求めて涎を垂らすグロテスクな光景が広がる。美月は反射的に顔をしかめながらも、怪物が自分を食べようとしていることに気が付くと脱出の方法を考えようとした。
だが、それでは遅すぎる。
次の瞬間、口の真上に持ってこられた美月の足首は拘束から解放される。
天使のような美貌を持ちながらも、翼までは持っていない少女は物理法則に従い落下を始めた。
おそらく、このままでは化け物の目論み通り美月は腹の中に収められてしまうだろう。
運動神経が良く、聡明な頭脳を持っていようが、蒼樹美月にはこの窮地を脱する力はない。
そう、彼女が蒼樹美月のままならば。
「くっ、このままあなたの胃の中だなんて、お断りだわ！」
普通ならば絶望するであろうこの状況下でも美月は冷静さを失わず、化け物の口の中に向かって落下しながら胸元に手を当てた。
蒼樹美月とは彼女が持つ姿のひとつにすぎない。
彼女には可憐な少女とは別のもうひとつの顔が存在した。
「お願い聖結晶、力を貸して……チェンジ・ストラクチャー！」
鈴の鳴るような凛とした声に応えるように、指先を乗せた胸元が蒼く輝き出し、プリズムのように瞬くエネルギー粒子を放出して特殊な変身力場が生み出された。
身体に付着した溶解液が蒸発すると共に溶けかけていた衣服が光の粒子となって消失し、フィールドの中で生まれたままの姿となる美月。湧き上がる力の塊を感じ取ると少女が触れていた胸元に蒼い光を放つ力の源である聖結晶が出現した。
結晶体から溢れるエネルギーの奔流は美月の身体中を駆け巡り、少女に戦うための力を漲らせていく。まさしくそれは変身であった。

美月を包む温かな光の粒子は魅惑の裸体を半透明のインナースーツでコーティングしていく。首から下の全身を包みこむ極薄のスーツはビニールのように引き伸ばされ、美月の身体に隙間なく密着していった。灰色のインナー越しに紅潮する肌が透けて見え、スーツの持つ光沢感が艶めかしくボディラインを強調していた。

素肌に吸い付き、シェイプアップされていくグラマラスボディはその魅力をいっそう高めていく。ピチピチのスーツの中に押し込まれたDカップの美乳は質感のあるバストラインをクッキリと示し、先端の突起がわかるほどに身体をなぞり上げていく。半透明であるがゆえに綺麗に引き締まったお腹の上では縦長のお臍が透けて見え、戦うために鍛えられた力強さが感じられた。

お尻の谷間や会陰にもスーツは貼り付き、腰回りの造形がこれでもかと浮かび上がる。股間の起伏すら見て取れてしまう締め上げは裸でいるよりも艶めかしく、フェティシズムを覚える魔性を秘めているようにも見えた。

しなやかに伸びる両腕も同様に指先までピチピチのスーツを纏い、ほっそりとした指の長さが主張される。一方で躍動感溢れる美脚は極薄スーツが内側からはち切れさせそうな肉感をアピールし、力強さを感じさせる太腿がムッチリとした魅力を高めて、完璧な脚線美は足先まで至高の美を纏う。

「うん……あっ……」

インナースーツを着用することで聖結晶から流れるエネルギーをより強く感じながらも、敏感な肌は身体を締め付けるスーツのフィット感に思わず声が漏れてしまった。

だが、変身はまだ第一段階にすぎない。

特殊力場の中で美月が両腕を水平に伸ばすと指先から二の腕にかけてエナメル質な漆黒のロンググローブが装着される。ギュッと拳を握り締め力の伝播を感じると、続けて爪先から太腿までをグローブと同色のハイソックスに覆われ、食い込む靴下の淵が太腿を押して更なる筋肉のハリを感じさせた。

手足のコスチュームと同質の胸当てがチューブトップ型に生み出され、締め上げられる86センチの巨乳。左右から圧迫されることで胸の谷間がより強調され、ただでさえ豊満な乳房はセクシーさを増していく。

純黒のショーツは股間に食い込み、機動性を重視したコンセプトのコスチュームという影響もあって際どいデザインとなっている。ローライズなデザインは鼠蹊部の起伏やお尻の谷間さえクッキリと浮かび上がらせ、密着する事でアスリートのようなボディに女性的な魅力を付与した。

一見すると下着と変わらぬコスチュームは着用と同時に聖結晶からのエネルギーラインが繋がり、着ていることを忘れさせる軽さでありながら脅威的な丈夫さを有するのだ。
聖結晶の加護に包まれていく美月の黒髪は根本から毛先にかけて金色に染まり、変身フィールドの中で漂う長髪が神話に登場する戦女神を連想させる。
ブロンドヘアーは黒のリボンによって頭の後ろで結い上げられ、活発さを示すポニーテールとなってなびいていく。
（よし、いくわよ！）
短く息を吐き、意識を集中することで少女は戦うヒロインへと変わる。
収束していくエナジーは美月の四肢に白銀の武装を展開し、中世の騎士を思わせる手甲と脚甲が戦女神の盾であり矛だった。
余剰エネルギーが天使の輪のように頭上で発散され、特殊力場から解き放たれた蒼樹美月は変身を果たす。
聖結晶という使用者の心に反応し、半永久的にエネルギーを生み出す結晶体に適合した奇跡の乙女。
夜の闇の中に身を置きながらも決して輝きを失わない、不屈の闘志を胸に宿す女戦士は己が名を高らかに宣言した。
「聖結晶姫ミツキ、ここに降臨！」
化け物の腹に収まる直前。あわやという場面で変身を終えたミツキは落下途中で膝を抱えて身体を丸める。
踏ん張りの効かない空中でクルクルと回転し、逃れるのではなく逆にスピードを上げていく聖結晶姫。まさに食われる寸前で両手を開き、凛々しき声と共に右腕へエネルギーを集中させた。
「はぁぁぁぁ！　ガントレット！　モードセイバー！」
手甲へと出現した光の刃が縦方向から怪物を一刀両断する。残光が刃の軌跡となり、鋭く切り裂かれた傷口は定規で線を引いたように真っすぐであった。
片膝と片手を付き着地を決めたミツキは屈んだ勢いをそのまま活かし、立ち上がると同時に横薙ぎの一撃を放った。パツパツに張った太股がキュッと締まり、腹筋と胸筋に繋げられたベクトルが蒼いレーザーブレードに乗せられて化け物を真っ二つに切断した。
流れるような連撃は速すぎるゆえに結果が同時に現れ、十字の傷口を刻まれて絶命する生物兵器。
腕を振って刃についた体液を払い落とし、クールな美貌は勝利しても揺るぐことなく保たれていた。

（ふぅ、変身のために人目を避ける必要があったとはいえ、今回は少し無茶をしすぎたわね。街への被害は最小限に抑えられたけれど、変身のタイミングは見極めないと）

人知を超えたオーパーツ、聖結晶の力は絶大であり、この程度の異形の怪物であれば束になってかかってこられても負けはしない。だがそれはミツキが聖結晶の力を完全に引き出せることが必須の条件。聖結晶姫ミツキに変身できてこそである。

（それにしてもここ数日で既に5体……数が多すぎだわ。やはり親玉を叩かなければ意味が無いわね）

科学の発展のため生み出された人工の浮島科学都市。その近未来都市でミツキは常に戦っていた。

研究や開発の裏側では私利私欲を満たそうとする悪の組織がいくつも蔓延り、先ほどミツキが退治した怪物もそれらの組織のひとつが生み出した物だ。

正体を隠し正義の変身ヒロインとして活動する聖結晶姫は科学都市の平和のため今日も戦う。

決意を新たにしたミツキは生物兵器を開発する組織殲滅のため、熾烈な戦いにその身を投じていくのだった。

※

豪奢なシャンデリアが煌めき、クラシカルな音楽の流れる会場はさながら中世の舞踏会を思わせる。鮮やかな真紅のカーペットの上には丸テーブルがいくつも置かれ、用意された料理とアルコールの数々は高級レストランにも引けを取らない豪華さと優雅な気品に溢れていた。

今宵はたくさんの著名人や財界の権力者を集めたダンスパーティーが開催されており、この場に居合わせる人々は皆、科学都市の発展に何らかの形で貢献している人物達であった。

それほどまでの大物達を集めたパーティーの主催者、シム・インセントはここ数年で勢力を拡大している青年実業家である。欧米系の顔立ちにガッチリとした大きな身体は高そうなスーツに包まれ、訪れた人々と談笑する姿は事業を成功させた勝者の顔だった。

もっともそれは彼が持つ表の顔に過ぎない。裏では事業の資金源として生物兵器の開発に携わり、悪の組織としての活動を行っていた。

（あれがシム・インセントね。あいつがこのパーティーの中で取引するデータ。それが手に入れば奴の悪事を明るみに晒す

ことができるわ）

和やかなムードに包まれるパーティー会場の中でただ一人研ぎ澄まされた気配を纏う少女がいた。壁を背にして背後の死角を無くし、手に持ったグラスは受け取ってから一口も飲まずにシムから目を放さない。黒髪の美少女、蒼樹美月は彼の悪事を暴くためダンスパーティーへ潜入していたのだ。

とはいえ、パーティー会場の中では目立って動くこともできず、今は様子見の状態が続いている。聖結晶姫として戦うことに生きてきた美月は元々交流や交渉に向いているとは言えない性格であり、潜入こそ成功したがその先に難航してしまっていた。

そして、もうひとつ。美月の作戦は予定外の妨害に晒されている。

「やぁ、お嬢さん。いかがですか、わたしと一曲」

「……結構です。今はそういう気分ではありませんので」

ダンスパーティーが開催されていれば、当然のように舞踏はついてまわる。先ほどから何人もの男達が美月に声をかけるが、作戦の事しか頭に無い女戦士はダンスの誘いを無下に断り続け、その様子を見ていた別の男性が自分ならばと声をかけてくる負の連鎖に陥ってしまっていたのだ。

（さっきの人、私の胸ばかり見て……これだから男っていう生き物は……こんなことならばもっと落ち着いたデザインのドレスにすべきだったわ）

人気モデルや女優も参加するパーティー会場の中で美月は彼女らと遜色ない美貌とスタイルを誇っている。その隠しきれない女神のようなオーラは常に男を魅了してしまっていた。

戦いに身を置き続け、年頃の少女とは思えぬほどファッションに疎い美月が選んだのはスタンダードなシアンブルーのドレスであった。腰の部分に大きめの白いリボンが縫い付けられ、凛々しい美月の雰囲気に気品のある華が添えられたようなシンプルなデザイン。腰回りと胸の辺りに植物の蔦を思わせる刺繍がされ、海のような青さを持つ滑らかな生地は光沢を持ってパーティー会場に舞い降りた姫君を思わせた。

大胆に開いた胸元は両肩から二の腕、背中までも晒し、ドレスと同色の首のチョーカーがアクセントとなって鮮やかな肌色を際立たせる。Dカップ美巨乳が作り出す谷間は健康的に熟れた色香をアピールし、鎖骨から続く艶めかしさが男達の目を最も惹いていた。女性らしい華奢さを感じさせる撫肩に引き締まった背筋の美しさに加え、腕を上げると見え隠れする腋

の下がマニアックなエロスを宿している。
　コルセットなど無くとも充分過ぎるほどに括れたウエストはヒップに向かうに連れてなだらかな曲線を描き、スカートの中では引き締まりつつも柔らかさを損なわないグラマラスなボディがあることを想像させた。バランスよく脂肪の乗った太腿と官能的なアーチを描く脹脛の組み合わせはメリハリの効いた脚線美を生み出し、青のニーハイソックスに絞め上げられることで一層魅力的なパーツとなっている。両腕にも靴下と似たデザインのロンググローブがはめられ、芸術的な腕の長さを主張した。
　同年代の女子よりも少し高めの身長は踵の高い靴を履くことで底上げされ、モデル並のプロポーションの良さに拍車がかかってもはや芸術品の域に達していると言っても過言ではないだろう。
　単に綺麗なだけではなく、女戦士として鍛えられた身体と少女特有の華やかさが混ざり合った奇跡のような存在を男達が放っておくなどあり得なかった。
「どうも、初めましてかな？　どうです、パーティーは楽しんで頂けていますか？」
　そう、それはターゲットであるシム・インセントでも例外ではない。
「……ええ、このような素敵なパーティーにお誘い頂き光栄です……ただ、こういう場は少し慣れないものでして、緊張しているかもしれませんね」
　美月の方からシムに対してアプローチをかけるプランは何通りか用意してきたが、向こうから声をかけてきてくれたのは好都合だった。父の代理でパーティーに参加した不慣れな令嬢を演じる美月は事前に調べ上げたデータを基に話を合わせ、シムの警戒を解くことに力を注ぐ。
　シュミレーションしていた通りに会話を進めながらも、言葉の端々に探りを入れていく潜入美少女。ボロを出さぬように注意を払うが、シムは思っていたよりも用事深い男ではないのか、意外にもトークは弾んでいった。
「ふふっ、貴女は中々にユニークな感性をお持ちだ。どうです、一曲踊りませんか？」
　差し出された男の手を少しだけジッと見詰めた美月は迷った素振りを入れながら握って返す。曲の始まりに合わせてホールドを組むと絵になる男女の組み合わせは自然と目を惹いてしまった。
　普通の少女が送るような学校生活と無縁であった美月にとって大勢に注目されるということは人生の中で経験が少なく、見られていると意識するのが苦手な一面がある。運動神経抜群の美月だが、視線に晒されてしまうと緊張で身体が強張って

しまい、思わずシムの足を踏んでしまう不格好なダンスとなってしまっていた。
「あっ!?　し、失礼しました。ダンスは、その、経験が浅くて……」
「いえいえ、この程度のことお気になさらないでください。むしろ、貴女のような美人に踏んで頂けるなど光栄ですよ」
不慣れな美月にも爽やかな笑みで返しダンスを続けるシム。一見すると美月をリードする頼れる男性にも見えるが、その目は時に品定めをするような邪な視線を宿す。踊りに合わせながら豊満な胸元やしなやかな腰つきを舐め回すように見詰め、実業家とは別の裏の顔を覗かせ始めていた。
二人の身体が密着し、美月の耳元に近づけられるシムの顔。その時、不意に美月だけに聞こえる声で野心を宿した男は語りかける。
「どうですか？　実はこのホテルの最上階に部屋をとってあるんです。今宵のダンスの続きはそちらでしませんか？」
美月の下調べではシム・インセントという男は女癖の悪い裏の顔を持っていることがわかっていた。定期的に開かれるパーティーで目をつけた女性に声をかけ、一夜を共にすることは良くあること。プライベートであるために護衛も付けず、シムが最も無防備になる時だと言ってもいい。
（予定とは違ったけれども、このチャンスを逃す手は無いわ。利用させてもらおうじゃない）
先ほどからスケベな目で見ら続けていたことにイライラも溜まっていた美月は、シムの誘いに対して頷いて答え、今夜のベッドの上のパートナーになることを了承するフリをして悪の芽を摘み取ることを決意したのであった。

※

（……ここね、あの男が言っていた部屋は）
ダンスパーティーがお開きとなり、シムの予約した部屋に赴いたのは夜も遅くなってからのことであった。二人が同じ部屋に入っていく瞬間を目撃されることを避けるため、あらかじめ手渡されていたカードキーを使いドアを開けると、薄暗い部屋の中で美月の訪れを待ちくたびれていたシムが両手を広げ歩み寄ってくる。
ドレス姿のままの美月を出迎えるシムの姿は見るからに隙だらけだった。今まで数多の女性を誘っては堪能し、欲望の赴くままに過ごしてきたキザ男には美月も権力や金に惹かれたターゲットの一人にしか見えていなかったのだろう。

（どうやら私が聖結晶姫だと気付いている感じでもないし、完全に勘違いしているわね）
美月が嫌悪感を抱く人物の特徴として、金や力で女性を思い通りにできると思っている男というものがある。目の前の敵はまさにその典型であり、にこやかに対応するように心がけながらも心の中ではすぐに叩きのめしてやりたい怒りが湧き上がっていた。
「やぁ、よく来てくれたね。会場で目が合った時から僕らは相性がいいと感じたんだよ。君だってそうだったろ？」
「えっ……ええ……そ、そうですね……」
警戒されないために話を合わせる美月であったが、近づいてきたシムに肌を晒す肩を撫でられると悪寒が走った。美肌の滑らかさを確かめるように撫で回し、いやらしい手つきで美少女を堪能するキザ男。
美月の背後に回り込み、後ろから抱きしめる手は胸元と足の付け根に伸び、黒髪から漂う清らかな香りを感じ取りながら、これから予定しているベッドでのプレイを楽しみにしているのが透けて見えた。
女好きとは知っていたが本当にだらしがない。シムが後ろから抱きしめているおかげで美月の表情が見えなくなっていたのは救いだった。
なにせ、彼女の我慢はもう限界を超え、怒りが顔に出てしまっていたのだから。
（私をその辺にいる普通の女の子だと思っているみたいだし……もう、我慢する必要ないわよね……）
元々隙があれば攻勢に転じようと考えていた美月は決断してからの行動が早かった。
抱き付くシムの手にそっと掌を重ねると、流れるような動きで一気に手首を捻り上げる。男性と女性という体格の差などものともしない戦いの技術が女戦士としてスイッチの入った美月の動きを加速させ、大きく足を引いて背後にいたはずの大男の更に後ろをとっていた。
腕を握り込んだ手に少し力をかければ、頭ひとつ近く背の高いはずのシムは簡単に床にねじ伏せられる。背中に膝を乗せ、左右の手で肩と手首を固定した美月は愛想笑いの仮面を外して、悪に立ち向かう正義のヒロインの顔になっていた。
「ッッッウ！　えっ、あっ、ちょっと、これは何かな？　冗談にしてはあまり笑えないんだけど」
「安心しなさい、冗談じゃないから。無駄な抵抗はしない方が身のためよ、まともにやりあえば貴方に勝ち目なんて無いんだから」
掴んでいる腕をギュッと締め上げると、シムは情けない悲鳴を上げ、逃れられない美月のホールドの中で無様にもがいて

いた。
聖結晶をその身に宿す美月の身体能力は変身前でも少なからず加護を受けている。力に溺れず鍛えた肉体は言うなればトップアスリート並の身体能力を有しているのだ。
その細い腕からは想像もできないパワーとテクニックで押さえつけられては、非戦闘員である青年実業家など相手になりはしない。口調を厳しくした美月はクールな瞳の奥に闘志を宿し、油断せずに作戦を遂行してく。
「貴方が裏で運用している生物兵器、その開発データを渡しなさい。今夜のパーティーも本当の目的はデータの受け渡しだったのはわかっているわ。断るようならば、腕の一本くらいは覚悟してもらうことになるわよ！」
「いっ、痛てててて！　や、やめてくれ！　データ？　何を言っているのか、僕にはさっぱり、っ、うぎいいいいいいい！」
組み敷かれる男の肩から骨の軋むような音が聞こえ、虚言は力に押し潰される。これ以上悪あがきをするならば、もっと痛い目にあってもらう。そう言いたげな鋭い眼差しはシムの背後に注がれ、美月は敵の動向に細心の注意を払い続けた。
そう、女戦士は男が一人だと決めつけて行動してしまっていたのだ。
こうしている間にも、仕組まれた罠が起動しているとも知らずに。
「ッッッ!?　えっ？　なに……虫？」
うなじの辺りにチクリと走った針で刺したような痛み。慌てて首の後ろを叩いた美月の手には小さな虫のような何かが潰れてへばりついていた。手袋に広がる紫色の体液は不気味に粘つき、背筋に熱いものが走った気がした。
――ドクン！
「う、ぁ……えっ？　あっ……ああ……」
心臓の音が急に大きくなったような気がした。
瞬間、激しい眩暈を覚えた美月は目の前が急に霞み出してしまう。無意識の内に呼吸が荒くなり、焦点が合わない瞳は物が何重にもダブって見えていた。
（な、なに？　急に身体が痺れて……錆びついたみたいに、動かせない……）
力強くシムの腕を掴んでいたはずの指先が震え出し、力が入らなくなっていくのがわかる。姿勢を維持することさえ辛くなってしまい、握力がなくなって拘束を維持できない。

捕縛に綻びが生じると、シムは美月との体格差を活かし、力任せに腕を振って背中に乗っていた女戦士を退けた。
「くっ、しまっ、きゃあああ！　ぅぅあ……えっ!?　あ、足が……」
一方、立ち上がろうとしても足がもつれ、起き上がることができなくなってしまった美月は床の上で弱々しく手足を震わせる。そうしている間にも、身体の痺れはドンドン酷くなっていき、顔には焦りの色が濃くなっていった。
「ふっーー、まさかこんな形で虫が役に立つとは思っていなかったよ。さっきの様子だと、どうやら僕の裏の顔を知っているようだけど、どこかの組織のエージェントかな？」
腕をロックされていたシムは手をブラブラと振りながら余裕の戻った口調で美月を見下ろし、立場を逆転させた女戦士に身の程を教えようと背後を取る。
このままではマズイと自覚しながらも、力の入らない美月が四肢をバタつかせた所で、その姿は地面を這う虫ケラのようなもの。ロンググローブに包まれた指先が苦し気に床の絨毯を掻き毟り、美少女は無様な獲物へと変わっていく。
「本当は君とのプレイで気持ち良くなってもらうのに使うつもりだったんだけどね。催淫虫の毒針を受けたんだ、もう足掻いても無駄だよ。身体が動かせないだろ？」
「あっ、う……さい、いん……ちゅう……ですって？」
敵の言葉をオウム返しのように繰り返す美月を眺め、にこやかに笑って見せたシムはしゃがみ込む。艶やかな黒髪を指の間に通して弄び、櫛をかけるようにロングヘアーを左右にすいていった。
女性の命とも言える髪を好き勝手される屈辱。毛先を持って匂いを嗅がれると寒気がし、すぐにでも止めさせたい美月だったが、シムの言う通り身体はまともに動かせず、力無く頭を振る程度のことがせめてもの抵抗だった。
後ろ髪を撫で分けられ無防備に晒される背中。大胆に肌を見せるデザインのドレスは色白な背中も露出しており、ジットリと汗ばみ始めた美肌は悔し気にプルプルと震えているようにも見えた。
悪意の籠った指先が美月の背中に乗せられる。陶磁器のような肌の質感を楽しむようにして、肩甲骨をなぞり上げられた瞬間、美月は背中を反り返らせた。
「ひっっ!?　えっ、あ、ひゃあああああああ～～！」
自分でも信じられないほど甲高い悲鳴が漏れ、背中を快感が走り抜けていく。身体の変化に戸惑う美月は肩を強張らせ、額に汗粒を浮かび上がらせていった。

「ははははっ、クールに見えて中々可愛い声を出すじゃないか。ダンスの時からしなやかに引き締まった良い身体だとは思っていたけれど、感度の方も相当なものみたいだね」
「ちょ、ちょっと、こんなことやめっ、ぅ！　ふっあぁぁぁぁ、こ、この、あっ、はあああああぁぁぁ！」
屈辱の声が抑えられず、男の指先ひとつで可憐な唇は艶やかな悲鳴を紡いでしまう。ただ背中を撫でられるだけで肌が敏感になっていくアスリートボディはピクピクと震え、肩を片手で押されると起き上がることができなくなってしまった。
背骨に沿って移動する指から虫の這いずるようなヌル付きが生み出されると無意識の内に悲鳴は色気を帯びていく。噴き出す汗は潤滑油のように滑りを向上させ、液感が更に美月の感度を上げてしまっていた。
（な、なに、これ!?　声が抑えられない……さっきの虫のせいなの？　か、身体が敏感になって……）
神経を剥き出しにされてしまったと錯覚するほど肌が鋭敏になっていく。触れるか触れないかという微妙な距離で背中を撫でられ、その度に肩が電気を流されたように跳ね上がってしまう。歯を食いしばって耐えようとしても強弱を付けたタッチの前ではまるで我慢が効かず、むしろ抗う姿は女好きなゲスを喜ばせるだけでしかなかった。
嬌声が上がり健康的な肉体は発汗を増すと共に徐々に赤味を帯びていく。感じてはいけないと意識すればするほど、撫でられる肌が感度を増してしまい、グラマラスボディは逃れられない泥沼へとハマってしまった。
「どうだい、気持ち良いだろ？　この虫は催淫作用もあるんだけど、それを差し引いても君は元々感じやすい体質みたいだね。ほ～ら、れろっ！」
「んっ、はっ、アアアア！　や、やだっ、背中舐めるなんて……この、や、やめなさい！」
ナメクジに這いずられたように粘つく感触が背中を駆け巡る。足の先まで突っ張った美脚が舌の動きに合わせて戦慄いてしまい、女戦士の身体からは増々力が抜けてしまっていく。強がった所で敏感ボディは素直に反応し、恥じらう美貌は耳まで真っ赤にして発情の色を濃くしていった。
男の唾液を塗り込まれ、替わりに舐め取られる美少女の汗。文字通り美月の身体を味わうシムは邪な事しか考えていない笑顔のまま舌を踊らせ、桃色に染まっていくヒロインに官能を流し込み続けた。
（やっぱり、こんなドレス着てくるんじゃなかったわ……こんな、背中で感じちゃうなんて……）
普段であればまず着ないであろう華やかなドレスは女体の持つ魅力を引き出す代償として、どうしても性的な装飾となってしまっている。背中を舐め回すシムは首筋を啜り、美月の口から新たな悲鳴を上げさせて屈辱を染み込ませていく。

着飾るためではなく、男を喜ばせるだけとなってしまった青色のドレスが想定外に恥ずかしくなってしまった美月は悔しさで唇を噛んでいた。

「あん！　はぅぅぅ、くぅぅぅ～～、もう、背中触らないで、ッウゥゥゥ～～！　ハァ、ハァ、こ、このぉぉ、調子に乗って……」

いくら我慢しようとしても快感が上回ってしまい、凛とした態度が保てない。乱れた呼吸はそこはかとなく色っぽく、濡れた唇の動きが少女に女の色香を上乗せしていく。

だが、それでも不屈の闘志は健在だ。ぎこちなく首を回し敵を睨み付ける女戦士の瞳に宿る光は少女の心の強さの表れであり、いやらしい虫の毒などに負けてなるものかと強い意志を示している。

（とにかく、まずはこの痺れをどうにかしないと……このままじゃコイツの思い通りになってしまうわ）

美月の体内に宿る聖結晶には入り込んだ毒を中和する能力が備わっている。だが、その効果が完全に発揮されるのは聖結晶姫へと変身していればの話だ。変身前である蒼樹美月のままでは解毒の力も十分の一程度に低下してしまい、回復には時間がかかり過ぎてしまう。

（敵に私の正体を知られるのは得策ではないけれど、現状打開のためには変身するしかないわ……）

聖結晶姫にさえ変身できれば、この窮地を脱出することは可能だ。いやらしく笑う男の顔に鉄拳の一発でも叩きこんでやり、女性を思い通りの玩具にしていることを後悔させてやろうと思った。

美月は大きく深呼吸して乱れる息をどうにか整えようとする。胸の奥にある聖なる力を凝縮し、身体の隅々までエネルギーを伝播しようとした。

（お願い聖結晶、私に力を貸して……よし、いくわよ！）

「くぅぅぅ～～、いつまでも、お前の思い通りにいくと思わないで！　チェンジストラク、んっ!?　くひゃ、ひゃあああああ～～っっ！」

逆転を狙った凛々しき転身の声は一瞬にして卑猥な悲鳴に変えられる。

目の前で火花が散り、凝縮しかけていたエナジーは願い虚しく霧散してしまった。

「やっ……む、胸触らないでよ、くぅぅぅ～～、この、放しな、あぁぁぁ、やめっ、ァァァァ！」

変身しようとした瞬間にドレスの隙間から胸元へ大きな掌が潜り込み、まろやかな巨乳は性欲の魔の手に犯される。慣れ

た手つきで這いずる指が女の喜びを瞬く間に生み出し、官能に染められていく美体。
　催淫虫の効果により、普通ならばくすぐったいレベルの背中でさえ感じてしまったのだ。元々が性感帯の塊である肉毬を丹念に揉まれては、その効果も桁が違う。だが、ここで諦めるわけにはいかない。敵の思い通りに喘がされてしまうことに悔しさを覚えながら美月は再度変身を試みた。
「ちぇ、チェンジスト、あっ、あっ、あああぁぁぁぁ～～ぅぅ……こ、このくらい……ハァ、ハァ、チェンジ、くうぅぅぅぅ～～」
　豊かに熟れたDカップを弄ばれると、必死に集めた聖結晶の力が霧散してしまう。胸の脇を掬い上げるように動く掌が快楽に染められていく心をかき乱し、力をうまくコントロールできない焦りが大きくなっていく。
　今まで聖結晶姫として多くの悪を討ち滅ぼしてきた美月だが、常に勝ち続けてこれたわけではない。時には卑劣な罠の前に敗北し、捕らわれの身となって不屈の闘志を折るべく淫惨な調教を受けたこともあった。
　最後には逆転するものの、敵の手によって辱められてしまった変身ヒロインの身体には淫らな爪痕がしっかりと残ってしまっている。凛々しく気丈な心を持つ一方で、女神のごときボディは性的な責めに弱いという悩みを抱えてしまっていた。
　そんな、快楽責めに脆い少女に与えられる、女性を蕩けさせることに長けたテクニックはまさに天敵だろう。数多のターゲットを陥落させてきたシムの指使いは美月とて例外ではなく、発情してしまった身体は翻弄されていく。
（ダメッ……さっきから感じ過ぎちゃって、集中できない……変身、できない……）
　聖結晶適合率１００パーセントという選ばれし少女とて、その力を制御するのは容易いことではない。強靭な精神力と鍛え抜かれた身体。その二つが揃ってこそ、聖結晶の真の力は引き出すことが可能になる。
　だが、今の美月にはそれができない。火照りを増していく胸は変身しようとする心さえ押し流し、桃色の波動に精神をかき乱されてしまう。
　変身できなければ、いくら聖結晶姫といえど同年代の少女とそう変わらない。むしろ、開発済みの敏感ボディを持ってしまっている分不利であった。
「ふふっ、君のような可憐なレディをいつまでも床に伏せておくなど僕の流儀に反するからね。さぁ、続きはベッドでしようか」
「くっ、こ、この、放し、ん、くぅっ！」

乳房を掴まれたまま引き起こされてしまう発情ヒロイン。相手の思い通りになりたくない一心で抵抗するも、絶え間なく与えられる乳悦が美月から抗う力を奪っていった。

痺れて脱力しきった美脚はドレススカートの中で辛そうに震え、立っていることさえ覚束ない。両脚で支えられない体重は掴まれている両胸へと圧し掛かり、揉みこまれる巨乳は更に感じてしまっていった。

「身体は引き締まっているのに、出るべきところはこんなにも柔らかくて、君はまるでヴィーナスだ。それにしても、君は本当に感じやすい体質みたいだね。僕の腕の中で喜んでいるのがわかるよ」

「うん、はっ、あ……ち、違うわよ、これは全部いやらしい毒のせいで……わたしは、感じやすくなんて……く、ふぅ……」

感じていることを否定する一方で汗ばんでいく乙女の肌は赤く染まっていく。手に吸い付くような餅肌はシムの掌で丹念に愛撫され、漏れる悲鳴が艶めかしく響いていく。拘束を引き剥がそうとするもの、変身前の美月の腕力では男の力には敵わず、胸責めに悶えるしかない非力さばかりが顕著になってしまう。

ゴム毬で遊ぶように握られていく美乳。それだけのことで、玩具にされるヒロインは面白いように身悶え、黒髪を振り乱して悔し気な声を漏らしていた。

「素直じゃないなぁ～、身体はこんなに感じているんだ、強がっても無駄だよ。ほらっ！」

「くっ!?　ひぅぅぅぅ～、やっ、そこ……ち、乳首、ダメッ！」

極上のマッサージを受けているかのように蕩けていくDカップ美乳。昂ぶりを抑えられない豊乳は火照りと共に先端を充血させ、桃色の蕾が泣きたくなるほど感度を上げてしまう。もったいぶって乳輪を撫で回されると、背中を反らせてだらしなく口を開けてしまう美月。

膝の頭を擦り合わせ、腰から崩れ落ちそうになる身体を辛うじて支えてはいるものの、メロメロに蕩けてしまっている淫乱ボディはそう長く持たないだろう。

追い打ちをかけるように乳首を摘まみ上げられ、浮き上がったハイヒールが床を叩いて美月は増々抗う術を失っていった。

（こんなの卑怯よ……そこは敏感なのに、そんなにねちっこくされたら、誰だって感じちゃうわよ……）

立っているのさえやっとの美月の両胸はシムの気の赴くまま好き勝手にいじられてしまう。ドレスからこぼれそうなほどに育った乳房が左右から圧迫され円を描いてこねられていく。力を込めれば指を沈みこませ、水風船のように形を変える巨乳は確実に淫らな熱を蓄えていた。

思わず甘い喘ぎを漏らしながら必死に意識を繋ごうとしても、乳首を一緒に責められてしまうと抵抗力が目に見えて落ちてしまう。ドレスによって括れを強調された細腰がクネクネと揺れ、悩まし気に歪む眉は正義のヒロインの顔をメスの表情へと変えつつあった。

「乳首がだいぶ弱いみたいだね、なら、こんなのは堪らないだろ」

「うぅぅ、くぅぅぅぅ～～～、んひいいいいいい！　そんな、先っぽグリグリされたらぁぁぁ――！」

歯を食いしばって耐えようとしても、それ以上の快感が美月のプライドを蹂躙していく。敵の指摘を認めてしまうように涙混じりの悲鳴を上げてしまい、背中を丸めようとする美月。だが、その程度ことで乳辱の魔の手からは逃れることができず、弱々しい姿を晒してしまうことで、乳首で感じてしまっているのを白状するようなものだった。

親指と中指で摘まれる突起は痛いほどに尖ってしまい、桃色に染まって性感の塊となっている。グミでも押し潰すかのように摘まみ回され、胸全体が熱くなっていくのが止められない。ドレスの内側に籠った熱気と汗が蒸れていき、かき乱される思考はもう変身のための集中力を集められなくなっていた。

乳頭に爪を立てられ、ほじられていく乳腺。痛みに中に混じる淡い気持ち良さが胸だけでなく全身を敏感にしていき、スカートの下の太腿が湧き上がる疼きを堪えるためにモジモジと擦り合わされた。

（私の弱いところ、バレちゃってる……ズルいわよ、こんなの……）

シムの腕を引き剥がそうとして指先が震え、力が抜けて垂れ下がる。女性の肉体を喜ばせることに慣れたキザ男のテクニックの前に、純情な少女はあまりにも無力であった。悩まし気に揺れる腰が止められず、じっとり浮かぶ汗粒は喘ぐ美月を輝かせ淫靡なる魅力を引き上げてしまっていく。

女性らしいラインを描く撫肩がピクピクと震え、大きくなっていく浅ましい声。感じやすいという自覚はあっても、まさかここまで脆くなってしまっていたとは。美月自身の想像を上回る乳悦が思考をピンクの霞で覆っていった。

「そんなに身体を震わせて可哀想に、もう立っていられないんだね」

指先ひとつで簡単に悶える少女を愛おしく見詰める変態紳士はイジメていた胸から手を放すと、支えてもらわねば立っていられない美月の腰に手を回す。抱き寄せられた発情ボディは向きを変えられる。ダンスを踊っていた時と同じく対面状態になると、シムは強引に美月の顎を引いて瑞々しい唇を奪った。

「んむ、ぅ、ちゅ、はぁ……き、キスなんて、いやっ、んんぅぅぅぅ！」

予想外の口づけに戸惑う美月は拒絶の意思を示そうとするも、厚い胸板を押す手にはまるで力が入っていない。立つこともできぬほどの脱力感に包まれてしまった女戦士の肉体は細腕をプルプルと虚しく震わせ、押し潰された桃色の唇に舌をねじ込まれてしまった。

口腔を乱暴に突かれ、歯茎を舐め回されるとゾクゾクとした淫感が背中を駆け抜け、反射的に背中が強張っていく。腰と頭に大きな手が添えられ、しっかりと抱きしめられてしまうと、もう何もできなかった。

（ダメッ、このキスおかしいわ……こんなやつにされてるのに、身体が気持ち良くなっちゃって……）

主導権を完全に奪われてしまい、鋭い眼光が霞んでいく。目元がトロンと垂れていき、凛々しかったはずの女戦士のマスクは快楽に翻弄されるメスの顔に変えられてしまう。

内頬を舐め回されてからかわれ、くぐもった喘ぎが重なり合った唇から断続的に漏れていく。押し返そうとする舌は巧みに絡め取られて軽くあしらわれ、喉奥まで唾液を注ぎこまれると喉元が僅かに跳ね、粘つく液を飲まされてしまっていた。

口で呼吸できずに苦し気に染まる柔らかな頬。小鼻がヒクヒクと震え、溢れた涎が口の端から透明な線を描いて細顎を伝い落ちていく。男くさい唾液を飲まされてしまうと、なぜか意識が混濁し、口内への愛撫に逆らうことができなかった。

（や、やだっ、これ……頭ががボーっとしちゃって……なのに、身体が火照って……）

純真な心を持つ少女にとってキスとは愛し合う者同士が行う行為だと認識している。本来であれば倒すべく敵などにされたら嫌悪感さえ抱くものの、決して気持ち良くなることは無いもののはずだった。

だが、注がれれば唾液を飲まずにいられず、お腹の底から沸騰していくように身体が熱くなっていく。麻薬のような依存性を植えつけられていく危うさを覚えながらも発情する女としての部分が求めてしまい、動揺の治まらない美月は愉悦に支配されつつあった。

「んちゅ……ようやく素直になってきてくれたみたいだね。それじゃあそろそろベッドで楽しもうか」

引き抜かれたベロを求めてしまうように切なげに震える美月。二人の舌先で唾液が糸を引いてアーチを描き、雫を垂らす涎は欲求不満の表れのようだった。美月自身、男を求めているなどというつもりはない。だが、女として芽吹かされてしまった肉体は心とは裏腹に疼きを膨らませてしまっていた。

高級ホテルの巨大ベッドがスプリングを弾ませ、横に寝かされる美月を優しく出迎える。男の手が完全に離れているというのに起き上がることができず、片肘をついた体勢でプルプルと腕が震えてしまっていた。

（このままじゃダメ……これ以上されたら、わたし、負けちゃう……身体中敏感になり過ぎて、本当に危険だわ……）

不屈の闘志を持つ女戦士には諦めるなどという言葉は無い。だが、どれほど心を強く持っても濃厚愛撫の前に蕩けさせられてしまった身体は応えてくれなかった。うつ伏せに向きを変えたところでパンパンに張った両腕は限界を迎えてしまい、起き上がろうとした意識が中途半端に残ってしまった腰はへの字を描くように突き出したまま動かせない。

それは抗い続けた戦士の格好ではなく、オスを誘うメスのポーズに見えてしまった。美月にその気がなくとも、美少女に卑猥なお誘いを受けたと誤解させるには充分過ぎる痴態。

「そうかい、今度はそっちを可愛がって欲しいんだね。いいよ、たっぷり気持ち良くしてあげるよ」

「な!? ば、バカなこと言わないで……私はそんなこと望んでな、ッ！　きゃあああああ！」

甘さを宿した声色は言葉とは逆に男を誘ってしまう。美月が動けないのを良いことに欲望をぶつけてくるシムはドレスの裾を捲り上げ、スカートに守られていた下半身を露わにした。昂ぶりからくる発汗でヌルヌルに濡れた太腿が艶めかしく輝き、スカートに籠っていた欲情の香りが広がっていく。

シロップのように甘い匂いは美月の発する体臭なのだろうか。艶やかな肌を濡らす液には汗とは別の体液も含まれており、特に股間と内腿からは身体から放たれる匂いとは別種の甘酸っぱい香りが漂っていた。

「ここをこんなに濡らして、嫌がっているフリをしていても身体は正直だね。下着の上からでも君のアソコが僕を欲しがっているのがわかるよ」

「ぅぅ、あああ、ち、違う……そんなわけないわよ……くぅぅ、もう見ないでよ……この変態……」

屈辱に耐え切れず唇を噛む美月は自身を鼓舞するようにシムの言葉を頑なに否定し続ける。ここで拒絶しなければ、そのまま流されてしまいそうな不安が胸を絞めつけ、無駄だとわかっていても何もせずにはいられなかったのだ。

しかし、女を自分の思い通りにできないと気が済まない若き実業家にとって、強がる美月の心はなんとしてでも折ってやりたい欲望を掻き立てる。気丈に振る舞おうとすればするほど、美月への色責めは苛烈さを増していくのだ。

「いいね、気の強い女性は好きだよ。君のように思い通りにならない女性ほど、屈服させた時の顔が堪らないからね。さぁ、もっとイジメてあげるよ」

ベッドの上から動けない美月の股の間に顔を近づけるシムはクロッチ部分をなぞり上げる。いくら気を強く持ったところで、散々昂ぶらされてしまった陰部は従順に反応してしまっており、アワビのような輪郭がショーツ越しに浮かび上がって、

物欲し気にヒクつく赤い肉壁が透けてしまっていた。
　ワレメに合わせて指が往復する。虫の這いずるような誘惑の愛撫がショーツに染み込んだ愛液を掬い上げ、トロミを持って糸を引く。たった一回なぞられただけで腰が抜けてしまいそうになり、甲高い悲鳴を上げる美月は大きく背中を跳ね上げた。
　黒髪を振り乱しスプリングの効いたベッドがギシギシと揺れる。強がっていても身体はとっくに限界だった。漏れる吐息は熱を帯び、細かく震える唇は半開きになったまま閉じることができない。
　胸に負けじと肉付きの良いヒップは快感に打ちひしがれて細かく弾み、抗えない気持ち良さによって尻タブを揺らしながら腰がクネクネと動いてしまって止められなかった。
「ひっっっ！　くぅ、あっ……ぅぅ、何が青年実業家よ、女の子を辱めることしか考えてない変態じゃない、ん、ぁ……お前なんかに、私は負けな、あああああ～～ッッ！」
　プライドを保とうとする言葉に対し、ショーツを押し込むようにして指が挿入される。布生地のおかげで深くまで潜り込むことはなくとも、性欲をコントロールできない秘肉にはそれで充分だった。
　陸に上げられた魚のように瑞々しい唇がパクパクと開閉を繰り返し、垂れ落ちる涎がシーツにいくつも染みを描いていった。
　女の子の最も大切な場所の入口で指を抜き差しされ、蕩けきった声が抑えられない。前戯とすればこれ以上にないほど揉みほぐされた聖域はクロッチ部分をズラされ、なす術もなく敵の眼前に晒されてしまった。
「ほほーー、これはこれは！　身体は理想的な成熟をしているというのに、こちらの方はまるで赤ん坊のようじゃないか。中々マニアックな趣味をお持ちだ！」
「い、いやぁぁ……見ないで……これは趣味なんかじゃないわよ……バカにしないで……」
　ズラされた布生地から見える肉厚の陰唇。充血して赤く開いた乙女の花弁はエッチなお汁を絶えず分泌してしまい、お漏らしでもしたかのようにグショグショだった。バランスの取れた肉ビラは左右対称になっており、性器もまた芸術的な美しさを持っていた。
　だが一方で美月くらいの歳ならばあるはずのものが見当たらない。クッキリと綻びが見えてしまう秘裂の周囲には陰毛どころか産毛すら生えていなかったのだ。聖結晶をその身に宿した影響なのか、元々の体質なのかはわからないが、美月にと

ってコンプレックスであるパイパンを暴かれたことは少女にとってとてつもない屈辱だった。
（ううぅ……だって、仕方ないじゃない……子供の頃から全然生えてこないんですもの……）
パーフェクトに思えるモデル級のボディの中にはもう一ヶ所女の子として気になる部位がある。それは平均よりもひと回り以上大きなクリトリス。無毛な上にすぐに陰唇からはみ出してしまうデカクリは美月にとって知られたくない秘密なのだ。
ショーツ越しに刺激された時点で真っ赤に染まって勃起してしまったお豆は皮を剥かれ、脆弱過ぎる状態で晒し物にされてしまった。ただでさえ感じやすくなっている今の状態で性的快感を得るためだけに存在する肉芽を責められてしまったら耐え切れるはずがない。
そして、美月を屈服させようとする男が、そんなわかりやすい弱点を見逃してくれるはずがなかった。
「んんん、ひっ、ひゃあああああ！　やめ、あぁぁ、舐めないで、そんなところ、らっめえええぇぇぇ～～！」
ムチムチの太腿を掴まれ逃げられなくなった美月の股間にシムの舌が這いずっていく。淫裂の上から下までも舐め回されると、脳がスパークして理性を保てず、あられもない悲鳴が本能に任せて飛び出してしまった。
取り乱せば敵が喜ぶことくらいわかっている。だが、ジッとしていたら頭がおかしくなってしまうほどの快楽が股間で絶えず爆発し、美月はベッドを軋ませ身悶え続けた。
「僕はね、挿れる前にこうやって味見をするのが好きなんだ。君のココはとても美味しいよ、特にこの豆の味付けはクセになりそうだ」
愛液まみれの淫核が舌先で転がされ、瞼の裏でいくつもの火花が散っていく発情ヒロイン。もはや奇声と呼んだ方がいい声を上げ、腰の弾みが一段と激しさを増す。クンニのレベルを超える愛撫が勃起クリを責めたて、最も敏感な性感が脆さを露呈していく。
膣蜜を飲まれるなどという変態プレイに晒されながら、それでも気持ち良くなってしまうのが悔しすぎた。ハイヒールを履いた足先は悦楽に翻弄されてピンと伸びきり、脹脛が張ってしまって痙攣を起こしかけている。
このままではダメだとわかっていても、陰唇を舐め回されるザラザラとした感触が考える力を奪っていき、美月はただ我慢することしかできなかった。
「段々とお汁のトロミが変わってきたね。イキそうなのかな？　いいよ、遠慮なく気持ち良くなってくれて」
「ひぃぃぃぃん！　アッ、アッ、だ、誰がぁぁぁ～～、こ、こんにゃのれぇぇぇ！　い、い、イッたりなんへぇぇぇ」

強がりたくとも呂律が回らず、アヘ声同然の言葉は惨めさが際立つだけだった。
もう、美月にはシムを跳ね除ける力などありはしない。それがわかっているからこそ、焦らすような責めは時間をかけて的確に精神の柱をやせ細らせ、女戦士の思考を桃色に染め上げていくのだ。
（それ、本当にダメっ……アソコ、こんなに舐められたら、お腹溶けちゃう……）
秘裂を舐め回されると直接責められてもいない膣中と子宮が燃えるように熱くなってしまう。快楽を求めてしまう女の中枢はもうメロメロになって抵抗できなくなっている。
お腹の底から伝播する淫熱は身体中を燃やし尽くし、汗だくになる肌にはドレスが貼りついて裏地の擦れでさえ感じてしまっていた。
ポタポタと雫を垂らす秘部の下では淡い灰色に変色したシーツ。力の入らない手が真っ白な布地にシワを生み出しながらギュッと握られ、そうやって縋ることが美月に許された我慢の仕方だった。
「んんんん、あっくひいいいいいい！　らめぇぇぇぇ、吸ったら、ジュプジュプしちゃぁぁぁ～～、あっ、あああああああ！」
陥落はもう時間の問題だった。クリトリスをバキュームされると、残っていた精神力まで吸い上げられてしまったような気がする。目の前が霞んでいき、子宮が断続的に収縮しているのがわかる。
アクメの気配を感じながらも、諦めたくない美月はシーツを噛んで狂ったように頭を振り続けた。
「我慢しようとしても無駄だよ。ホラ、もうイッちゃいなよ」
「ひぃいいいーー　い、いいいいっ！　や、やらぁぁぁ、わらひ、イカらいい、ま、負けたく、なひいいいい！」
四肢が震え、高鳴る心臓と痙攣する膣中。
この期に及んで拒絶の意思を示せた精神力は流石最強の女戦士と言えようか。だが、変身前の蒼樹美月ではもうここが限界だった。
クリトリスを甘噛みされた瞬間、美月の中で何かが弾ける音がした。それは理性やプライドと呼ばれるものだったのだろうか。聖結晶の強さとは心の強さ。しかし、戦士である前に女である身体は許容範囲を超えた快楽の前になす術なく蹂躙されてしまったのだった。
「ひいいいいい

ブッシャ！　ブッシュ、ジュブブブブブ！

電撃を受けたかのように美体が跳ね上がったと同時、決壊した美月の股間から白濁した愛液が噴き出していた。取り繕うこともできないほどの量の潮を吹き、美月の股間に顔を埋めていたシムの顔が恥蜜で汚されていく。

意識も理性も消し飛ばした激し過ぎる絶頂によって惨めなアヘ顔を晒す敗北ヒロイン。ベッドの上で頭が傾き、だらしなく開いた口から泡まみれの涎がトロトロとこぼれ落ちていた。ピクピクと痙攣する四肢はベッドの上から降りる力さえ残っておらず、戦慄き続ける赤味を帯びる股間の二枚貝はおねだりするようにヒクヒクと開いている。

「ははははっ、随分と派手にイッたじゃないか。どうだい気持ち良かったろ？　でもね、本番はこれからだよ。せいぜい最後まで壊れないでくれよ」

「……ぅぅ……あっ、あ……」

意識が朦朧としたまま擦れた呻き声を上げる美月はうつ伏せから仰向けに寝かされ直す。脱力し、だらしなく股を開かされると、シムはベルトを外してズボンを脱ぎ、嬉々とした顔で自慢のイチモツを取り出した。

美月の艶姿を観賞し、すっかり硬くなった肉棒はまさに凶器だ。少なくとも、イッたばかりの美月にとってはそう見えていた。

（うぁ……い、今はダメ……さっきイッたばかりなのに……あんなので突かれちゃったら……もう、本当にもたないわ……）

ただでさえ敏感な美月の身体はイッた直後に更にもう一段階感度が上昇してしまう。おそらく今の状態でシムに犯されてしまったら、正気でいられる自信がなかった。

絶対に犯されてはいけない。これ以上は危険だと本能が訴えるも、催淫虫とアクメに蝕まれてしまった淫乱ヒロインは起き上がれず、片足を掴み上げられ股を開かされてしまった。

ゆっくりと近づいてくる男根が美月にトドメを刺すべく陰唇に密着する。完全敗北の時はもう目の前まで迫っていた。

（こ、このままじゃ、またイカされちゃう……こうなったらイチかバチか）

「ぐ、ぅ、ぁぁ、ち、チェンジストラクチャァァァァァ！」

絶対絶命の瞬間、美月は今にも切れそうな理性の糸を辛うじて繋ぎ合わせ、変身の言葉を叫んでいた。

呼応するようにドレス姿の美少女の胸元に出現する聖結晶。だが、エネルギーの凝縮も、精神力の集中も充分ではない、無理矢理な状態では変身のための力場が生み出されない。

インナースーツはおろか、髪の色も変わらず、ただ胸元に蒼色の結晶体を呼び出すだけの力技だった。
そんな状態では人知を超えたオーパーツを制御することなどできるはずもなく、美月の体内を暴走状態に近い聖結晶のエナジーラインが走っていく。まるで電子回路がショートしていくようにバチバチと火花が散り、ドレスに合わせたロンググローブが内側から裂けて弾け飛んだ。
「きゃあああああ！　ぅぅぅ、あああああ、くぅ、あ、あ……」
（腕が爆発しちゃいそうだわ……で、でも、今はこれで乗り越えるしか）
本来であれば変身途中に当たるエナジー伝播のプロセスを無理矢理作り出した美月の片腕に聖なる力が宿る。快楽に翻弄され、完全な変身ができない美月が選んだのは生身のまま聖結晶の力を行使することだった。
普通の少女と変わらぬ状態のままでは身体が持つはずがない。現に右腕は無数の針で串刺しにされたかのような痛みに晒され続け、激痛で気がおかしくなりそうだった。
それでもこのピンチを脱するためには手段など選んではいられない。予想外の美月の行動に唖然とするシムは動きが止まり、その隙をついて美月は敵の弱点を殴り飛ばしていた。
そう、あまりにも無防備に晒されている睾丸という男の急所を。
悲鳴を上げたシムはベッドから転げ落ち、股間を抑えたまま床の上で悶え苦しんでいる。恐らくしばらくは行動不能であり、美月にとっては逆転のチャンスでもあった。
「痛っゥゥゥゥ！　あっ、あああ、はぁ、はぁ、はぁ……」
（さすがに無理をし過ぎたわね……悔しいけど、ここは逃げるしかないわ）
生身のまま聖結晶の力を引き出した代償として、美月は身体中の筋肉を痛めてしまっていた。特に攻撃に使った右腕はダメージが酷く、感覚が麻痺しかけている。
もし、ここで仲間でも呼ばれてしまったら、今度こそ逃げられない。暴走しかけている聖結晶をなんとか落ち着かせた美月は作戦を断念し、怒気を帯びた叫びを放つシムを放置してホテルから脱出した。
力技でひとまずはピンチを逃れたかに見えた女戦士。
だが、逃げるだけで精いっぱいだった美月は気付いていなかった。
その身に施されてしまった淫らで陰湿な罠、催淫虫の誘惑がこれから始まろうとしていたことを。

※体験版は以上になります。
続きは製品版にてお楽しみください。